第６３号　2015 年１月 31 日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン
東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

2014 年暮れから 2015 年の１月にかけて、各ベースで、大忙しの期間を過ごしました。その中のいくつかをご紹介したいと思います。まず、石巻ベースでは、新年会を兼ねたお餅つきを初めて行いました。これは、いつもお茶っこに来ている被災者の方々の熱い希望に応えたものでした。カリタス釜石は、「男女」という言葉を「みんな」と読ませるところにも、その意気込みが感じられる「地域防災力ＵＰ講座」を開催しました。仙台教区サポートセンターで、新しく始めた「子ども支援」関係の活動の紹介と、海外からの連帯のニュースとして、パリで行われた「東北被災者応援チャリティーコンサート」の模様をお知らせいたします。末尾にカレンダーのお知らせも掲載しております。

新年会を兼ねたお餅つき

カリタス石巻ベース　　中村　愛

１月１７日に新年会を兼ねて餅つきを行いました。餅つきをベースで行うのは、初めてのことでした。餅つきで使う道具をどこで借りるか、材料をどこで購入するか、餅米の蒸し時間はなど、手探り状態で始まりました。計画中もベースに来られる利用者さんや賄いさんから「あんこはこのお店があるよ」「お餅の味はこの味で食べるよ」など、色々アドバイスをいただきました。

前日に会場設定を行い、いざ当日。朝のミーティング後、昨晩から水につけていた餅米を蒸し、臼に移そうとした時、スムーズに餅米が落ちてこないというハプニングが起こりました。お米を蒸す前に下に敷く布を濡らすのを忘れていたのです。そのような中でも手早く賄いさんたちが対処してくださり、餅つき再開。会場に餅をつく杵の音とかけ声が響き始めました。

当日、来場された方々は 50 名以上。子供から大人までの参加があり、席がいっぱいになり、賑やかな会場になりました。「最近は餅つき機で餅をつくから、臼で餅をつくのを久しぶりに見た」と餅つきを楽しそうにご覧になる方や、「子どもたちにも見せたくて」と家族で来られた方がいました。また「餅をついてみたい」と言って、大人と一緒に杵を持って餅をつく子供もいました。初めてベースを訪れた方もいらっしゃいました。

つきたてのお餅はというと、あんこ、ずんだ、納豆、草餅、雑煮でいただきました。お餅の味はもちろん「美味しい」のひと言でした。

当初の計画では１４時までだったのですが、計画していたペースよりも早く餅つきが終わり、１２時前に終了してしまいましたが、参加された方々は喜んで帰って行かれました。

12 時以降に「お餅つきは？」と来られた利用者の方もおられましたが、事情を説明して、ついたお餅を食べていただきました。

今回の新年会を通して気づいたことは、参加された方々が積極的に手伝ってくださったことでした。ついた餅を丸めるのを手伝ってくださった女性の方々や杵を持って餅つきをして下さった男性の方々。そして、餅つきの経験を活かして裏方で活動して下さった賄いさんたち。たくさんの方々に助けていただきながら行われた餅つきでした。また、初めて餅つきをする事を心配して下さり、餅米を蒸しやすい分量で準備してくださったお米屋さん、お米券を寄付して下さったシスター、目に見えるところや見えないところでたくさんの方々に支えていただきながら行われた餅つきでした。

お餅つき当日は、阪神淡路大震災から２０年目の日に当たりました。その日に餅つきをすることが出来たのも一つの偶然だったのかもしれません。いつか東日本大震災から２０年目の日を迎える時が来ます。その時、石巻がどのような姿になっているかはわかりません。しかし、今日の餅つきを通してこの地に住む人々が関わりを持ち、一緒に復興に向かう気持ち、助け合う思いが深まっていただけたらと思いました。そして、石巻ベースがその架け橋になる場所でありたいと感じました。

男女（みんな）の視点を取り入れ実践する 地域防災力 UP 講座について

特定非営利活動法人カリタス釜石　　千田　榮

１月 24 日、25 日にかけて「男女（みんな）の視点を取り入れ実践する　地域防災力 UP 講座」を開催しました。

初日は、釜石市内の町内会、市民活動リーダー、関心のある方を対象に行われました。東日本大震災後、平常時から地域で生活する様々な人たちの視点の重要性が増しています。それが防災に強い安心安全な町づくりを担うということを軸に、早稲田大学地域社会と危機管理研究所招聘研究員の浅野幸子氏を迎え、講義とワークショップをしていただきました。

５グループに分かれ、会場の間取り図面を囲み、意見を出し合いました。避難所に住民が 100 人逃げてきており、その中には、妊婦・乳幼児５人、車いすの人がいる場合、部屋はどのように割り振りするか、その際、配慮すべきことは何か考える机上での訓練でした。

進めていく中で「高齢者、子どもへの配慮は？」から「高齢者」と一括りにしていいのか、元気な人もいれば、そうではない人もいる。障害の有無や性別により配慮が違ってくるという気づきが参加者の中から挙がりました。また避難所運営での役割分担について、実際に津波被害のあった地区の女性から、「女性は炊き出しの役目をしなければならないということではないのですね。」という感想もありました。講師の声もかき消される程の会場内。「今回で終了ではなく、次回もやっ

て欲しい。」「参加できなかった人にも教えたい。」とのお言葉をいただき、手ごたえを感じました。

二日目は、市内在住の外国人、おおむね中国からの実習生が対象でした。こちらも浅野氏の講義をふまえ、グループ毎に話合いました。災害が起こった場合「目の見えない人」「ぜんそくの人」「園児・小学生」等が困ることの欄にイラスト付きのカードを置いていく作業でした。通訳もつきましたが、皆さん、日本語を理解していてスムーズに進みました。スタッフ側も、自分が異国で災害にあった場合も想定でき、改めて当事者の立場になって考えるという基本に立ち返ることができました。二日間とも、市の備蓄倉庫にある簡易トイレ、非常用ローソク、テント等の展示をいたしました。

今回の講座は、釜石市、減災と男女共同参画研修推進センターとの共催で開催することができました。参加者は一日目 37 名、二日目 53 名、皆さん、日頃から災害について、家族や地域内で話し合う必要性を感じたようです。震災を経験した釜石から防災について発信する活動を続けていきたいという思いがあらたになった二日間でした。

売り場では販売していない遊びに、新鮮さを感じ、楽しそうに遊んでいました。外では、凧揚げ、羽根突き、独楽回しと日頃馴染みのない道具を使っての遊びは、子どもたちを真剣にさせます。あいにく、風が強く羽根突きは出来なかったのですが、その代わりに羽根突き用の罰ゲームに購入したフェイスペイントで、日ごろのストレス発散と言わんばかりに、スタッフたちの顔に思う存分落書きをして大はしゃぎ。ドタバタ大笑いの一日でした。

釜石市の「放課後子ども教室 MOSICA」での今年最初の教室は、開催場所である甲子町の仮設団地にて仮設の住民さんをお招きし、餅ぜんざいのお振る舞いをさせていただきました。室内で書初めや双六をしている子どもたちを見て、住民さんは目を細めながら「懐かしいねえ。子どもたちかわいいねえ。」等とお話されていました。この仮設団地はすぐ隣にグラウンドがあり、いつも子どもたちはサッカー等をしていますが、今回は皆、凧揚げに夢中です。誰が一番空高く揚げられるか競争したり、とても高く揚がる凧に興奮し、「家の人に見てもらう」と言って凧を揚げたまま家に戻ろうとする子どももいて（結局は電線に引っかかるので断念しましたが）、無邪気に遊ぶ子どもたちの目はキラキラ輝いています。なんとも微笑ましいこの光景を眺めながら、私はふと、錯覚に陥ります。ここは被災地ではなく、どこか懐かしい匂いのする過去か未来か分からない時代へタイムスリップしたのではないかと。いつかはこんな平穏な場面が日常に戻ってくるのだと、子どもたちを通して感じます。子どもはこの土地の未来を創造していくのだと肌で感じます。

これからも、子どもの成長を感じながら、ここが今の子どもたちにとってかけがえのない愛すべき「ふるさと」であり続けるよう一緒に寄り添っていきたいと、また、地域住民の皆さんと一緒に温かく愛情を込めて見守っていきたいと、そう思っております。

昔懐かし、お正月の風景

仙台教区サポートセンター　　長島　明子

仙台教区サポートセンターは、昨年末から釜石市と大槌町の子どもたちの支援を本格始動させ、釜石市では市の教育委員会の指導のもと、他団体と共催し、「放課後子ども教室 MOSICA」を開校。大槌町では、カリタス大槌ベースの子ども支援事業のお手伝いをさせていただいております。

年明けのイベントとして、それぞれの地域で子どもたちと地元住民の方々を交えて、餅つきや書初め、昔懐かしの遊びを一緒に楽しみました。

大槌町では、安渡地区自治会の新春交流会と合同で開催し、子どもたちは住民さんに助けてもらいながら餅つきに挑戦。重い杵にふらつきながらも一生懸命お餅をついていました。また、室内では、カルタや、福笑い、双六と最近のおもちゃ

～フランス　パリからの便り～

スズシャン合唱団との合同チャリティーコンサート

在仏パリ日本人会女性コーラス「みもざ」

１月 25 日、パリのリヨン駅近くの教会にて、在仏パリ日本人会女性コーラス「みもざ合唱団」と日仏コーラス団体「スズシャン合唱団」、そしてオルガン、ギター、アコーディオン、コントラバスとの多彩な音楽家たちとの共演による「東北の被災者応援チャリティーコンサート」が開催されました。

パリでは新年早々、ご存知のようにテロ事件が起こり、その記憶も生々しい中でのコンサート開催となったため、どれだけの方々にご来場いただけるかわからない状況でした。

しかし、コンサート当日は、多くの方々がご来場され、会場も満員で、大盛況の中に無事終えることができました。

すでに震災後４年近くが経つ今、過去の出来事のように記憶を風化させないで現在も進行中という状況を理解していただき、仮設住宅にお住いの方々や、不自由な環境で生活されている方々、そして解決していない問題等を今一度考える場にできたら、と願い、今回のコンサートを開催する運びとなりました。

日本人である私たち自身でも、ともすれば距離的にも時間的にも遠のいたという認識になる可能性があり、日本から離れた土地ではなおさらそれが顕著です。また、何があったかというインパクトの強い間は報道されても、その後、人々が毎日どう暮らしているか、という日常については、なかなかリアルタイムで聞こえてきません。仮設住宅での長引く生活や、心身の健康問題、放射能への危惧など、少しずつ漏れるようにして出てくる記事などから想像するだけになっています。あまり声高に語られない事柄については、なおさらです。

しかし、こちらでも親日家やお心のある方々からは、震災後の現在の様子について必ず尋ねられます。まず事実を知り、それを伝えるのも大切な事だと実感しています。このようなことから、音楽を通して私たちの気持ちやメッセージを少しでも多くの方へお伝えするため、宗教や思想などに関係なく、善意だけで集まった音楽家たちによってコンサートは開かれました。

コンサートでは、仙台司教区内の支援活動などの概要を簡単にお話しし、また、被災者の方々の現況、募金がどのように活かされるのかということを簡単にご紹介しました。そして、会場には、カリタスの活動状況ポスターも貼らせていただきました。

その結果、900 ユーロ近く（日本円にして約 10 万円）の寄付金が集まりました。東日本大震災の被災者のためにと心を込めての皆さまからの義援金です。有益に募金を活用していただければと思っております。

３月 14 日は、パリ日本人カトリックセンターで、またチャリティーコンサートを開催する予定です。また別な報告が出来ることと思います。

復興支援カレンダー2015　注文受付中！

『東日本大震災復興支援カレンダー２０１５年３月～２０１６年３月』について、お申込期限を２月１０日までとしておりましたが、お申込期限を延長して、在庫がなくなるまで対応させていただくことになりました。また、これまで発送の場合は５部以上での注文をお願いしておりましたが、１部から対応させていただくようにしました。

被災地へ足を運ぶことはできないが何かしたいと思っている方は、ぜひ身近な方へこのカレンダーをプレゼントし、お話ししていただくことで、被災地へ寄り添っていただければと思います。

カレンダーをご希望の方は、お申込用紙に必要事項をご記入の上、FAX またはメールで仙台教区サポートセンターまでご連絡ください。FAX やメールをお持ちでない場合は、お電話で対応させていただきますので、お気軽にお問い合わせください。
皆さまからの多くのお申込・ご協力をお待ちしております。
どうぞよろしくお願いいたします。

カレンダーお申込・お問合せ先
◆仙台教区サポートセンター
お申込
メールアドレス　sendaidsc@gmail.com
FAX 番号　０２２－７９７－６６４８
お問合せ
電話番号　０２２－７９７－６６４３

※お申込用紙は、カリタスジャパンブログから入手可能です。
http://caritasjapan.jugem.jp/?eid=279

※１月末現在、在庫は十分にございますが、お早めにお申し込みくださいますよう、よろしくお願いいたします。

～カレンダーにまつわる１つのエピソード～

３月のカレンダーには、１枚の大きなポスターを持ったかわいい男の子が載っています。

この男の子は、震災後に生まれ、保育所に入るまでは、お母さんと一緒によく石巻ベースへ遊びに来ていました。ベースのアイドル的存在で、ベースに来られる方々の心を和ませていました。そんなある日、当時のベース長・シスター杉田がパチリと写した写真が、2012 年度の支援活動を紹介するポスターとなりました。

３年経って、大きく成長した男の子がベースへ来た時、自分の写ったポスターを持って喜んでいる姿がありました。ベース長・シスター細谷がその姿を見つけ、さっそくカメラを向けました。その時撮影した写真が、今回カレンダーに採用されました。

男の子がこのように成長したように、石巻ベースもこの３年の間に成長しています。